

好きな野球チームを集団カテゴリーに用いた 内集団協力の検討

——協力のコストがかからないシナリオによる場面想定法実験——

中 川 裕 美¹

(受付 2018年5月28日)

要 旨

本研究の目的は、現実中存在する集団カテゴリーを用いて内集団協力の心理過程を検討することである。これまで内集団協力の心理過程は、社会的アイデンティティ理論 (SIT) と閉ざされた一般互酬性仮説 (BGR) という二つの理論で説明されている。従来、SIT と BGR は互いに相互背反の理論として検討されてきたが、近年では両理論の心理過程それぞれが独立して働き内集団協力を引き起こす可能性があるとして主張されている。この主張を踏まえ、中川他 (2015) が野球ファンを対象に場面想定法実験を行ったところ、両理論の心理過程はそれぞれが同時に働くことが明らかになった。さらに、中川他 (2015) のシナリオに協力のコストを明示した追試では、コストを強調することが BGR の心理過程により強く働くことが示された (中川他、投稿中)。ただし、協力のコストが状況要因であると結論づけるには、協力のコストが存在しないときに BGR の心理過程の説明力が減じることを示す必要がある。したがって、本研究では中川他 (2015) のシナリオに協力のコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行った。この状況では、参加者が互惠性 (協力への返報) を期待できず BGR の心理過程が十分に引き出されないことが予測される。分析では野球ファンと回答した参加者が少なかつたため、ファンではないが広島東洋カープが比較的好きと回答した参加者で分析を行なった。その結果、協力のコストがかからないと明示しても BGR が支持された。ただし、本研究と同様の結果が野球ファンを対象とした場合でも再現されるかについては今後の検討が必要である。

キーワード：内集団協力、野球ファン、社会的アイデンティティ理論、閉ざされた一般互酬仮説

日本においてプロ野球は広く親しまれている娯楽であり、特定のチームを応援する野球ファンは約30%前後の一定数で安定している (2009-2017年；三菱 UFJ リサーチ & コンサルティングとマクロミルによる共同調査, 2017)。さらに、野球ファンが選手や地元地域に対する愛着を持つほど、ファン同士のコミュニティへの所属意識が高められ、その所属意識の高さがチームへのアイデンティティを強化するという (仲澤・吉田, 2015)。本研究では、集団への所属意識が高いと仮定できる広島東洋カープ (以下、カープ) という野球チームを集団カテゴリーに用い、同じ所属のメンバー (内集団) に対する協力行動を検討する。カープなどの

1 データの収集に際して、広島修道大学の中嶋智史先生にご協力いただきました。また、同大学の中西大輔先生、横田晋大先生には本論文の執筆にあたりご指導いただきました。ここに記して感謝申し上げます。

所属意識の高い集団をカテゴリーに用いる目的は、実験室状況を超え現実味のある協力的行動の心理過程を検討することにある。カープファンの熱狂度／所属意識の高さをうかがえる現象はいくつかある。例えば、2009年の新球場設立を機に観客動員数は上昇し続け、2015年には球団設立以来の200万人を上回ったことが挙げられる（一般社団法人日本野球機構，2017）。また、カープの人気はTV視聴率の高さからも明らかであり、25年ぶりのリーグ優勝を決めた対巨人戦の視聴率は、60.3%を記録した（ビデオリサーチの許諾を得て掲載，2016）。

このように野球ファンは自分が応援するチームの勝敗に敏感であり、熱狂的な集団行動をとることが確認されている。こうした熱狂的な集団行動の中には、ファンがひいきのチームを単に応援するだけでなく、同じチームを応援するファンを助けるという内集団協力も含まれる。内集団協力とは、内集団に対して好意的に評価したり、協力的に振舞ったりすることである。応援チームとの心理的な結びつきが強いスポーツファンは、特にこの内集団協力が生じやすいことが知られている（Levin, Prosser, Evans, & Reicher, 2005; Platow, Durante, Williams, Garrett, Walshe, Cincotta, Lianos, & Barutchu, 1999）。しかし、現実に存在する集団（以下、実在集団）にはステレオタイプや集団間葛藤など、協力的行動に影響を与え交絡する要因が存在する。そのため、内集団協力に関する研究では、実験室で一時的に集団状況を設定する最小条件集団パラダイム（Minimal Group Paradigm：以下、MGP; Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971）を使用して検討されることが一般的となった。

これまでのMGPを用いた実験によって、内集団協力の背後にある二つの心理過程が明らかにされている。それぞれの心理過程を説明した代表的な理論が、社会的アイデンティティ理論（Social Identity Theory：以下、SIT; Tajfel & Turner, 1979）と閉ざされた一般互酬仮説（Bounded Generalized Reciprocity hypothesis：以下、BGR; Yamagishi & Kiyonari, 2000）である。従来SITとBGRはどちらが内集団協力の説明原理として妥当であるかが議論されてきたが、近年では両理論の心理過程はそれぞれが独立に働くことで内集団協力を引き起こすと主張されている（Stroebe, Lodewijkx, & Spears, 2005; 横田・結城, 2009）。前述した通り、SITとBGRの妥当性はMGPを用いて検証されることが多い。その一方で、実在集団を対象とした両理論の妥当性や適用範囲に関する検討はいまだ十分ではない（牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船・牧村・山岸, 2007; Yamagishi, Makimura, Foddy, Matsuda, Kiyonari, & Platow, 2005）。すなわち、実在集団においてこれら二つの理論の心理過程が、相互背反的あるいは独立して働くのかは不明であった。

そこで、中川・横田・中西（2015）は野球ファンを対象に場面想定法実験を行い、SITとBGRの妥当性を検討した。その結果、両理論で記述される心理過程それぞれが同時に働くことで、内集団協力が引き起こされることが示された。さらに、中川他（2015）のシナリオに協力のコストを明示した追試を行うと、コストによってBGRの心理過程がSITよりも相対

的に強く働き内集団へ協力的になるというパターンが得られた（中川他，投稿中）。以上より，協力のコストはBGRの説明力に影響する条件の一つであることが示唆されるが，そう結論づけることは早計である。なぜなら，中川他（投稿中）では比較となるコストがかからない状況は検討されておらず，協力のコストが状況要因であるとは断言できないからである。

したがって，本研究では中川他（2015）のシナリオに協力のコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行う。日本プロ野球機構12球団の中で好きな野球チームという集団カテゴリーを用いて，コストがかからない状況における内集団協力を検討する。以下では，まずSITとBGRで説明される心理過程を説明し，両理論それぞれの立場から実在集団／MGPにおける内集団協力を検討した研究を紹介する。

社会的アイデンティティ理論

MGPとは集団に元々存在するステレオタイプや集団間葛藤を排除して，社会的アイデンティティの効果のみで内集団へ協力的になるかを検討するために生み出された実験技法である。MGPでは集団内や外集団との対面した相互作用を無くし，実験室内でのみ用いられる些細な基準（絵画の好みなど）によって集団に分類される。MGPを用いる利点は，内集団協力をを行う理由になり得る全ての要因を排除した上で，それでもなお集団カテゴリーの違いのみで内集団協力が生じるかを検証できることである。

Tajfel & Turner（1979）は，MGPを用いて自己と内集団の存在を同じと見なす集団同一化が起こるだけで内集団協力が生じると主張するSITを提唱した。Hogg & Abrams（1988）によると，個人は社会的な比較を行うことによって自分自身の信念の有用性や正確さを学習していく。言い換えると，自分と同じ存在である内集団は良い／正しい集団として認識したいとの動機づけから，内集団を外集団よりも優越させることで肯定的な自己の欲求を満たすようになる。SITでは内集団を外集団より優れた存在として際立たせようとした結果，内集団協力が生じると主張された。

閉ざされた一般互酬性仮説

SITでは内／外集団との関係性に着目されたが，BGRでは集団内の関係性が重視されており（Yamagishi & Kiyonari, 2000），適応的な視点から，内集団協力は集団内の一般交換関係を維持し集団内の互惠的な関係から排除されないために生じると主張されている。一般交換関係とは，「情けはひとのためならず」ということわざに象徴されるように，自分が何かしら良いことをすればいずれは巡り巡って恩恵が返ってくる関係のことをいう。つまり，集団内で協力すれば相手からの直接的な返報は期待できないが，その行いによって他の内集団成員からの間接的な互惠性を期待できる。すなわち，内集団成員に協力しておけば，内集団成員

同士の互恵的な関係性を維持でき、協力しなかった場合は、集団から排除され今後集団内で利益を享受できなくなる。そのため、長期的にはひとまず協力しておくことが、非協力における搾取のメリットを上回る適応的な行動である。

山岸らの一連の研究 (*e.g.*, 神・山岸, 1997; 清成, 2002; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008) では、SIT を反証するため MGP を用いた上で集団所属性の知識を操作する実験技法が考案された。参加者と協力相手が互いに集団所属性の知識を共有できるか否かを操作することにより、互恵性の期待の有無が操作された。自分と相手がお互いに内集団成員であることが認識できる時のみ、互恵性を期待することができる。数多くの実験を重ねた結果、集団への同一化だけではなく互恵性を期待できる状況でなければ、内集団協力が生じないことが頑健に示された。

内集団協力に関する研究の現状

上述の通り、BGR の妥当性を検討した研究者たちは、同一化はできるが互恵性を期待できない状況では内集団協力が生じないことを示し SIT の反証を試みた。この知見に対して、SIT 側からの反証はほとんどなく、唯一の Simpson (2006) も Yamagishi & Mifune (2008) によって実験方法の妥当性について問題があると反論された。すなわち、現段階においては、MGP を用いた研究の結果から BGR が内集団協力の説明原理として優勢になっている (*e.g.*, Balliet, Wu, & De Dreu, 2014; 神・山岸, 1997; 清成, 2002; Romeo, Balliet, & Wu, 2017; Yamagishi, Jin, & Kiyonari, 1999; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008, 2009)。

このように SIT と BGR は内集団協力を説明する対立理論として、それぞれの妥当性が検討されてきた (*e.g.*, Simpson, 2006; Tajfel & Turner, 1979; Yamagishi & Kiyonari, 2000; Yamagishi & Mifune, 2008)。しかし、近年では SIT と BGR の心理過程は相互背反的なものではなく、両立し得ることが主張されている (中川他, 2015, 投稿中; Stroebe et al., 2005; 横田・結城, 2009)。つまり、SIT と BGR の心理過程はそれぞれで独立しており、どちらがより強く働くのかはある状況要因に規定されるという。例えば、Stroebe et al. (2005) では集団に相互依存性が存在する時には BGR の心理過程が引き出されやすく、横田・結城 (2009) では外集団脅威が存在する場合には SIT、存在しない時には BGR の心理過程が引き出されやすいことが分かっている。

また、MGP/実在集団という集団の性質の違いによって、SIT と BGR の妥当性が左右されるにもかかわらず、その問題に焦点を当てた研究は少ない。MGP における内集団協力の説明には、BGR が SIT よりも優勢とされてきた。その一方、実在集団を対象とした場合には BGR が明確に支持された研究 (牧村・山岸, 2003a, 2003b; 三船他, 2007; Yamagishi et al., 2005) がほとんどなく、SIT が支持される傾向にある (*e.g.*, Abrams, Rutland, & Cameron,

2003; Gallagher & Cairns, 2011; Hennessy & West, 1999; Liebkind, Henning-Lindblom, & Solheim, 2006; Mummendey, Klink, & Brown, 2001)。しかし、実在集団において両理論の妥当性を同時に検討した研究がほとんどないことや実験方法に問題点が残されていたことから、MGPではBGR、実在集団ではSITが優勢であると結論づけるには早計であると考えた。実験方法の大きな問題点は、実在集団の交絡要因（ステレオタイプや規範など）が統制されていなかったことである。

中川他による問題点の改善及び実験内容

中川他（2015、投稿中）は上記二つの問題点を改善するため、交絡要因を統制した上で両理論の妥当性を検証できる実験デザインを構築した。両理論の妥当性を同時に検討することによって、SITまたはBGRの心理過程のみ、あるいはどちらの心理過程も働くことによって内集団協力が生じるのか明らかにすることが可能になった。中川他（2015）は大学生のカープファン117名を対象に場面想定法実験を行い、両理論の妥当性を検討した。中川他（2015、投稿中）が野球ファンを対象とした理由は2点ある。まず、野球ファンはSITの先行要因であるチームとの同一化が強く、BGRの先行要因である互惠性も期待しやすいからである（Berendt & Uhrich, 2016; Yoshida, Gordon, Heere, & James, 2015）。同一化および互惠性を期待しやすい野球ファンは、両理論の妥当性や適用範囲を検討する上で妥当であると考えた。2点目は、ライバルチーム（外集団）の存在が顕著になる野球ファンを対象にすることにより、現実で起こる集団間葛藤時の心理メカニズムの理解につながることを期待されるからである。

中川他（2015）の実験では、相手（内集団成員／不明）が援助を必要とする場面を想定させ、援助行動の意図を測定した。その結果、SITとBGRの心理過程がどちらも働く内集団協力が生じていた。しかし、一つの研究結果のみから両理論の心理過程が両立すると結論づけることは妥当ではない。また、中川他（2015）で用いたシナリオには、参加者が相手を援助する際にかかるコストが明示されていなかった。そのため、非協力の誘引が弱く、実際の援助場面よりも協力しやすい状況であった可能性も考えられる。さらに、一般交換関係が成立する集団内は、自己の投資に見合った報酬が返ってくるとの返報が前提として成り立つ。協力のコストが些細なものとして認識されれば、自己の協力が返報されるだろうという交換の感覚が十分に引き出されず、BGRに基づく協力行動が生じないことも示されている（Kiyonari, Tanida, & Yamagishi, 2000）。さらに、大学生のカープファンのみで得られた結果では、外的妥当性に限界がある。

したがって、中川他（投稿中）では一般人の野球ファンを対象に、中川他（2015）のシナリオに協力にかかるコストの内容を記載して、非協力の誘因を高めた追試を行った。中川他（投稿中）の目的は、実在集団の対象を拡大し協力のコストという要因を加えても、SITと

BGR の心理過程の両立性が再現されるか検討することであった。一般人の野球ファン1635名を対象に実験した結果、協力のコストが明示されると BGR の心理過程が SIT よりも強く働き内集団協力が生じることが示された。これらの結果から、協力にコストが明示されない場合とされる場合では、内集団協力の心理過程の働きが異なることが示唆された。

本研究の目的

先行研究により、協力のコストがかかると BGR の心理過程が強く働いて内集団協力が引き起こされることが明らかになった。しかし、中川他（投稿中）では比較になるコストがかからない状況は検討されていなかった。中川他（2015）では協力のコストを明示していないものの、参加者がコストをどのように見積もっていたかは測定されていなかった。すなわち、参加者が、コストをデフォルトでどれくらいかかると想定していたかは不明であった。したがって、本研究では好きな野球チーム²を集団カテゴリーに用いて、中川他（2015）のシナリオにコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行う。Kiyonari et al.（2000）の主張を踏まえると、協力のコストがかからない状況であれば BGR の説明力が弱まることが予測される。

仮説

協力にコストがかからない場合、互惠性の期待が十分に高まらず SIT のみが支持される。

方 法

実験参加者・日時

実験は2017年の9月と12月に行われ、広島修道大学の学生57名（男性32名、女性25名）が参加した。そのうち、カープファンが3名（男性2名、女性1名）、ファンではないが比較的好きなチームにカープを選択した者が42名（男性21名、女性20名、不明1名）、それ以外のチームを応援する／比較的好きな人が7名（男性5名、女性2名）、無回答が5名いた。本研究では、野球ファンを参加対象であることを前提として質問項目やシナリオを作成した。ただし、応援するチームがないと回答した者でも、比較的好きなチームを一つ選択した後、ファンと同じように全ての項目に回答することができる形式になっている。しかしながら、本研究ではカープファンの人数が極端に少なかったため、以下の分析では好きなチームにカープを選んだ参加者のみ（以下、カープ好き）で検討を行った。カープ好きの平均年齢は19.81（ $SD=1.12$ ）歳であった。

2 好きな野球チームをカテゴリーに用いた理由は、方法で後述する。本研究の当初は、野球ファンを対象に検討することを予定していた。

実験デザイン

シナリオに登場するあなた（参加者）と第三者のBさん（相手）がカーブのTシャツを着ているか否かで互恵性の期待を操作する3条件（清成，2002）が設定された（実験参加者内）。お互いに相手がカーブ好きだと分かる内集団相互条件，参加者だけが相手をカーブ好きだと分かる内集団一方条件，お互いに相手の集団所属性の分からない相互不明条件の3条件を設けた。また，ファンではない参加者には，質問項目，シナリオ内，図中に記載の「ファン」の部分で「好き／好きな人」に置き換えて回答するよう求めた。Bさんは，参加者と面識の無い第三者であると教示された。シナリオのはじめに，「応援しているチームのある人は，このページ以降の設問に出てくるAチームは，あなたの応援しているチームだと思ってください。」「応援しているチームのない人は，Aチームをあなたの比較的好きなチームだと思ってください。」という教示文を提示した。

各条件に共通して，互いに相手の所属について推測している図（Figure 1, 2, 3）とともに「各シナリオでは，あなたも，シナリオに登場するBさんも，Aチームのファンです。」と教示した。その後，内集団相互条件では「あなたもBさんも，お互いにAチームのファンであると分かります」，内集団一方条件では「あなたはBさんがAチームのファンであるとは分かりますが，Bさんからはあなたがどこのファンであるか分かりません」，相互不明条件では「あなたも，Bさんも，お互いに相手がどこのチームのファンであるかは分かりません。」と説明した。集団所属性の知識条件ごとに提示するシナリオの内容は全て同一であった。

相互不明条件を設定したシナリオに回答した後，内集団相互条件と内集団一方条件を回答する順序をランダムに設定することによりカウンターバランスをとった。また，援助期待と援助行動のシナリオを回答する順序も，参加者約半数ごとに順序をランダム化した。

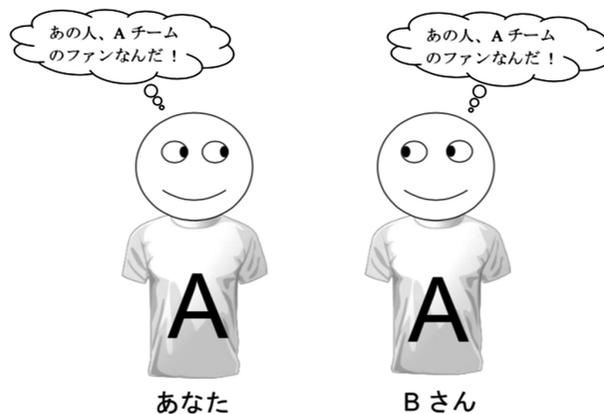


Figure 1. 内集団相互条件

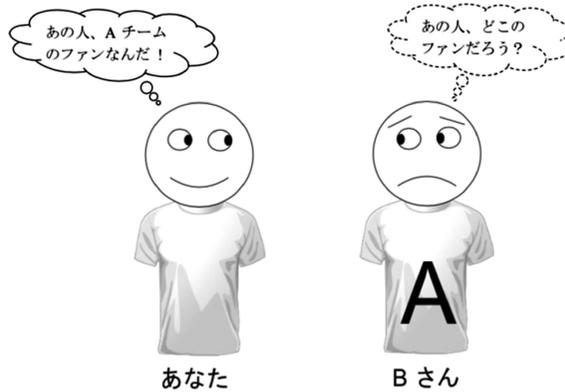


Figure 2. 内集団一方条件

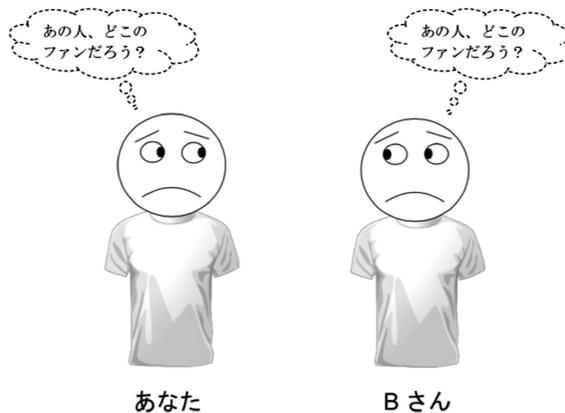


Figure 3. 相互不明条件

質問項目

応援する／比較的好きな野球チームの選択（全12球団）。シナリオによる援助行動／援助期待（知識条件別），集団同一化（Kaiser & Pratt-Hyatt, 2009; Hogg, Fielding, Johnson, Masser, Russell, & Svensson, 2006）と相互依存の認知（神・篠塚, 1996）を測定した。

シナリオの内容

参加者は始めに日本プロ野球機構が定める12球団の中から応援する／比較的好きなチームを選択した。その後、協力にはコストがかからないことを明示した上で、相手（Bさん）が日常で困っている場面を想定させ、援助行動（内集団協力）の意図を測定した。援助行動のシナリオ内に出てくる「Bさん」と「あなた」を逆転させ、Bさんが参加者を助けてくれると思う程度（援助期待）も測定した。内容が異なる4つのシナリオを提示し、5件法（1. 全くそう思わない-5. 非常にそう思う）による評定を求めた。シナリオの内容を Table 1 に示す。

SIT と BGR の先行要因を測定する尺度

集団同一化では、個人がチームと集団を同一視している程度を測定した。主語を全て「〇〇ファン／好き」に変えて作成をし、5件法（1. 全く当てはまらない-5. 非常に当てはまる）による評定を求めた（Table 2）。相互依存の認知では、主語をすべて「〇〇ファン／好き」に変えて7件法（1. 全くそう思わない-7. 強く思う）により測定した（Table 3）。集団同一化と相互依存の認知の尺度はそれぞれ数値が高いほど、自己と集団が同じ存在であると見なし、一般交換関係に基づく互恵性が集団内で成り立つことを強く信じていることを示す。

Table 1

シナリオの内容

1. Bさんは、電車の乗り継ぎの仕方が分からずに困っています。そこにあなたが通りがかりました。 <u>もし、あなたがBさんに道を教えてあげても、時間があるので支障はありません。</u> あなたは、Bさんに乗り継ぎの仕方を教えてあげると思いますか？
2. Bさんは買い物をして、街を歩いていました。Bさんはつまずいてしまい、袋の中身が散乱しました。そこにお惣菜を買おうとしたあなたが通りがかりました。 <u>もし、あなたが拾うのを手伝っても、欲しかったお惣菜が売り切れることはありません。</u> あなたは、Bさんを手伝ってあげると思いますか？
3. Bさんはケガをして、松葉杖をついてバスに乗りこみました。バスは全座席が埋まっています。 <u>もし、あなたが席を立てても次の停留所で降りるため、長い時間立ちっぱなしになることはありません。</u> Bさんの目の前に座っているあなたは、Bさんに座席を譲ってあげると思いますか？
4. Bさんは、道を歩いている途中で転んでしまい、その拍子に車のカギを排水溝に落としてしまいました。開けようとしても、排水溝のフタは重くてびくともしません。そこに友達との待ち合わせ場所に行くあなたが通りがかりました。あなたは、早起きしたため、 <u>もし、フタを開けるのを手伝っても、友人との待ち合わせ時間までは十分余裕があります。</u> たまたま一部始終を見ていたあなたは、排水溝のフタを開けるのを手伝ってあげると思いますか？

Table 2

集団同一化項目

1. 自分が典型的な〇〇ファン（好き）であるとされたら、気分がいい。
2. 〇〇に深く関わっていると思う。
3. 自分が〇〇ファン（好き）であるという事実が分かると、幸せだと思う。
4. 自分は、他の〇〇ファン（好き）と似ている。
5. 〇〇が好きだ。
6. 自分は〇〇に合っていると思う。
7. 他の〇〇ファン（好き）との一体感を感じている。
8. 自分にとって、〇〇は重要だ。
9. 自分を定義する上で、〇〇ファン（好き）であることは重要だ。
10. 自分は〇〇ファン（好き）の中の一人である。
11. 〇〇ファン（好き）であることに満足している。
12. 〇〇ファン（好き）であることが心地よい。
13. 〇〇ファン（好き）であることは自信になる。

Table 3

相互依存の認知尺度

1. ○○ファン（好き）であれば、ファンの（好きな）人に親切にすれば必ず自分のためになる。
2. ○○ファン（好き）の間では、自分だけ得をしようとして行動すると結局は損をしてしまうことが多い。
3. ○○ファン（好き）は、お互い持ちつ持たれつである。
4. ○○ファン（好き）としてうまくやっていくためには、他のファン（好きな人）と助け合わなければならない。

結 果

以下の分析にはHAD 16_050（清水，2016）とR 3.5.0（Ihaka & Gentleman, 1996）を用いた。まず、援助行動における4つのシナリオ場面のクロンバックの α 係数を求めたところ、4つの場面で十分な内的整合性が得られたため（ $\alpha_s > .82$ ）、全項目を合算し援助行動得点とした。同様に、援助期待も十分な内的整合性が得られたため（ $\alpha_s > .81$ ）、全項目を合算し援助期待得点とした。同一化項目（ $\alpha = .93$ ）および相互依存の認知（ $\alpha = .73$ ）は合計して平均得点を算出した。カープ好きの同一化（ $M = 35.22, SD = 10.55$ ）は、5件法の中点3点（どちらでもない） \times 13項目の39点より低いことから、チームへの同一化は弱いことが明らかである。相互依存の認知（ $M = 16.46, SD = 4.51$ ）は7件法の中点4点 \times 4項目の16点よりやや高い値であった。

援助期待／援助行動

Figure 4 にカープ好きの各条件における援助期待／援助行動得点の平均を示す。互惠性の期待の操作が成功したか確認するため、援助期待を従属変数、集団所属性の知識条件を独立変数とした分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった（ $F(2, 82) = 9.97, p < .01, \eta^2 = .06$ ）。Holm 法にて条件間の下位検定を行うと、内集団相互条件が内集団一方条件、相互不明条件よりも高かった（ $p < .05$ ）。内集団一方条件と相互不明条件における協力行動に差は見られなかった。内集団相互条件で援助期待が最も高いという結果は、MGPを用いて検討した清成（2002）と一貫しており、互惠性の期待の操作は成功した。

次に仮説を検証するため、援助行動を従属変数とし集団所属性の知識条件を独立変数として分散分析を行ったところ、条件の主効果が有意だった（ $F(2, 82) = 7.02, p < .01, \eta^2 = .03$ ）。条件間の下位検定（Holm 法）を行うと、内集団相互条件が内集団一方条件より高く（ $p < .05$ ）、

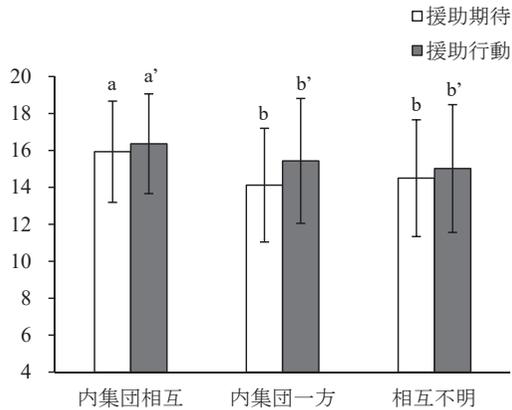


Figure 4. カーブ好きの援助期待／援助行動得点
 注) エラーバーは標準偏差。英添字が異なる場合は、群間に有意な差があることを示す。

相互不明条件よりも高かった ($p < .01$)。内集団一方条件と相互不明条件の協力行動に有意な差はなかった。上記の結果から、仮説は支持されずコストがかからない状況でも BGR が支持された。

さらに、コストがどの程度協力行動に影響を与えたのかを検討するため、本研究の援助行動／援助期待のシナリオ得点から、中川他 (2015) で対象とした野球ファンではなかった人 (112名) の得点³を引いたものによって、増減値を算出した。援助行動における増減値は、内集団相互条件では -0.11 、内集団一方条件では -0.20 、相互不明条件では $+0.83$ であった。同じく援助期待では、内集団相互条件が $+0.16$ 、内集団一方条件が $+2.37$ 、相互不明条件が $+1.51$ であった。

相関分析

さらに、各条件における援助行動／援助期待と同一化、相互依存の認知の相関分析を行ったところ、内集団相互条件における援助行動 ($r = .37, p < .01$) は、相互依存の認知との間に有意な正の相関関係があった (Table 4)。相互依存の認知の高さは、互恵性を強く期待していることを意味する。つまり、参加者は内集団相互条件における協力は互恵性の期待に関連することが確認された。

3 中川他の実験手続きでは、野球ファンではない場合、好きなチームを選択するのではなく、ある A チームのファンだと仮定した上で全ての回答を行うように教示した。つまり、中川他と本研究は、厳密には同じ状況下における協力行動ではない。

Table 4

カーブ好きの全項目とシナリオの相関係数

	援助行動			援助期待			同一化
	相互	一方	不明	相互	一方	不明	
内集団相互（援助行動）	—						
内集団一方（援助行動）	.64**	—					
相互不明（援助行動）	.55**	.89**	—				
内集団相互（援助期待）	.30 [†]	.39*	.32*	—			
内集団一方（援助期待）	.40**	.62**	.70**	.25	—		
相互不明（援助期待）	.16	.64**	.69**	.52**	.83**	—	
同一化	-.17	-.12	-.12	.16	.09	.18	—
相互依存の認知	.37*	.20	.13	.27 [†]	.12	.09	.35*

** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

考 察

本研究の目的は、協力のコストがかからない状況における内集団協力の心理過程を検討することであった。これまでの先行研究から、協力のコストがかからない状況ではBGRの心理過程の働きが弱まると予測した。しかし、本実験で予定していた野球ファンの人数が少なく、分析が困難であった。したがって、ファンではなく比較的好きなチームにカーブを選んだ参加者を分析対象とした。実験の結果、協力にコストがかからない場合でもBGRに基づく内集団協力が生じた。コストがかからなくともBGRの心理過程が働いたことから、些細な協力であっても人々は互恵性を期待して内集団協力を行う傾向が非常に強いことが示唆された。しかし、野球ファンとは異なりチームへの同一化の程度は、中川他（2015）で対象としたカーブファン（ $M = 40.55$, $SD = 11.58$ ）に比べ弱かった。つまり、本研究で用いた「カーブが好き」という集団カテゴリーは、些細な基準で集団を分類するMGPと類似していたと考えられる。そのため、協力行動のベースラインの指標にはなり得るが、实在集団としてのカテゴリーの意味はなく社会的アイデンティティの効果が十分に引き出されていなかった可能性が高い。

本研究の限界

本研究は中川他（2015）のシナリオを踏襲し、協力のコストがかからないことを明示した場面想定法実験を行なった。協力のコストが内集団協りに及ぼす影響を検討するため、中川

他（2015）と本研究で得られた援助行動と援助期待の値を知識条件ごとに比較した。コストがかからないことが認識されていれば、本研究の協力行動の値は中川他（2015）よりも高くなるはずである。しかし、中川他（2015）に比べ、本研究では全ての条件で援助期待のみ得点が高く、援助行動では統制条件のみわずかに得点が高くなっただけであった。このことから、参加者に協力のコストがかからないことが十分に認識されていなかった可能性もある。ただし、自分を助けてくれる相手は、コストがかからないなら協力してくれるだろうという期待が高まる傾向であった。このことは、自分と相手の負担を同等に扱っていないことを示唆しているが、両理論からこの相違を説明することは難しい。したがって、今後は操作チェックとしてコストによって協力をためらう程度を測定したり、実験的に全くコストがかからない状況（Kiyonari et al., 2000）を設定したりする必要があるだろう。今後の課題は、社会的アイデンティティの効果が強い野球ファンを対象に、コストがかからない状況における内集団協力の心理過程を検討することである。

引用文献

- Abrams, D., Rutland, A., & Cameron, L. (2003). The development of subjective group dynamics: Children's judgments of normative and deviant in-group and out-group individuals. *Child Development, 74*, 1840–1856.
- Balliet, D., Wu, J., & De Dreu, C. K. W. (2014). Ingroup favoritism in cooperation: A Meta-analysis. *Psychological Bulletin, 140*, 1556–1581.
- Berendt, J., & Uhrich, S. (2016). Enemies with benefits: the dual role of rivalry in shaping sports fans' identity. *European Sport Management Quarterly, 16*, 613–634.
- Gallagher, E., & Cairns, E. (2011). National identity and in-group/out-group attitude: Catholic and Protestant children in Northern Ireland. *European Journal of Developmental Psychology, 8*, 58–73.
- Hennessy, J., & West, M. A. (1999). Intergroup behavior in organizations: A field test of social identity theory. *Small Group Research, 30*, 361–382.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social Identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. (p. 22) London: Routledge.
- Hogg, M. A., Fielding, K. S., Johnson, D., Masser, B., Russell, E., & Svensson, A. (2006). Demographic category membership and leadership in small groups: A social identity analysis. *Leadership Quarterly, 17*, 335–350.
- Ihaka, R., & Gentleman, R. (1996). R: A language for data analysis and graphics. *Journal of Computational and Graphical Statistics, 5*, 299–314.
- 一般社団法人日本野球機構（2017）. 統計データ セントラル・リーグ 年度別入場者数（1950–2017）Retrieved from http://npb.jp/statistics/#central_section（2017年10月10日発表）
- 神 信人・篠塚寛美（1996）. 相互依存認知と協力傾向 日本社会心理学会第37回大会発表論文集, 154–155.
- 神 信人・山岸俊男（1997）. 社会的ジレンマにおける集団協力ヒューリスティクスの効果 社会心理学研究, 12, 190–198.
- Kaiser, C. R., & Pratt-Hyatt, J. S. (2009). Distributing prejudice unequally: Do whites direct their prejudice toward strongly identified minorities? *Journal of Personality and Social Psychology, 96*, 432–445.
- 清成透子（2002）. 一般交換システムに対する期待と内集団協力——閉ざされた互酬性の期待に関する実験研究—— 心理学研究, 73, 1–9.
- Kiyonari, T., Tanida, S., & Yamagishi, T. (2000). Social exchange and reciprocity: confusion or a heuristic? *Evolution and Human Behavior, 21*, 411–427.
- Levine, M., Prosser, A., Evans, D., & Reicher, S. (2005). Identity and emergency intervention: How social group

- membership and inclusiveness of group boundaries shape helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 443–453.
- Liebkind, K., Henning-Lindblom, A., & Solheim, E. (2006). Ingroup favouritism and outgroup derogation among Swedish-speaking Finns. *Nordic Psychology*, 58, 262–278.
- Platow, M. J., Durante, M., Williams, N., Garrett, M., Walshe, J., Cincotta, S., Lianos, G., & Barutcu, A. (1999). The contribution of sport fan social identity to the production of prosocial behavior. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice*, 3, 161–169.
- 牧村洋介・山岸俊男 (2003a). 成員間に相互作用がある集団における集団間報酬分配に関する実験研究 心理学研究, 73, 488–493.
- 牧村洋介・山岸俊男 (2003b). 集団カテゴリーと集団間行動——国籍カテゴリーを用いた実験研究—— 21世紀 COE「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No. 19, 1–18.
- 三船恒裕・牧村洋介・山岸俊男 (2007). 国籍カテゴリーを用いた「閉ざされた一般の互酬性仮説」の検証 21世紀 COE「心の文化・生態学的基盤」ワーキングペーパーシリーズ, No. 68, 1–10.
- 三菱UFJリサーチ&コンサルティングとマクロミルによる共同調査 (2017). Retrieved from http://www.murc.jp/publicity/press_release/press_171019 (2017年10月19日発表)
- Mummendey, A., Klink, A., & Brown, R. (2001). Nationalism and patriotism: National identification and in-group and out-group rejection. *British Journal of Social Psychology*, 40, 159–172.
- 中川裕美・横田晋大・中西大輔 (2015). 実在集団を用いた社会的アイデンティティ理論および閉ざされた一般互酬仮説の妥当性の検討——広島東洋カープファンを対象とした場面想定法実験—— 社会心理学研究, 30, 153–163.
- 中川裕美・横田晋大・中西大輔 (投稿中). 野球チームのファンの内集団協力に関する場面想定法実験 心理学研究.
- 仲澤 眞・吉田政幸 (2015). ファンコミュニティの絆——プロスポーツにおけるファンコミュニティ・アイデンティフィケーションの先行要因および結果要因の検証—— スポーツマネジメント研究, 7, 23–38.
- Romano, A., Balliet, D., & Wu, J. (2017). Unbounded indirect reciprocity: Is reputation-based cooperation bounded by group membership? *Journal of Experimental Social Psychology*, 71, 59–67.
- 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD——機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案—— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59–73.
- Simpson, B. (2006). Social identity and cooperation in social dilemmas. *Rationality and Society*, 18, 443–470.
- Stroebe, K., Lodewijckx, H. F. M., & Spears, R. (2005). Do unto others as they do unto you: Reciprocity and social identification as determinants of ingroup favoritism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 831–845.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149–178.
- Tajfel, H., & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33–47). Monterey, CA: Brooks/Cole.
- ビデオリサーチのサイトより引用, 許諾を得て掲載 (2016). Retrieved from <https://www.videor.co.jp/digestplus/tv/2016/05/712.html> (2016年5月23日掲載)
- Yamagishi, T., Jin, N., & Kiyonari, T. (1999). Bounded generalized reciprocity: Ingroup boasting and ingroup favoritism. *Advances in Group Processes*, 16, 161–197.
- Yamagishi, T., & Kiyonari, T. (2000). The group as the container of generalized reciprocity. *Social Psychology Quarterly*, 63, 116–132.
- Yamagishi, T., Makimura, Y., Foddy, M., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow, M. J. (2005). Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. *Asian Journal of Social Psychology*, 8, 173–190.
- Yamagishi, T., & Mifune, N. (2008). Does shared group membership promote altruism?: Fear, greed and reputation. *Rationality and Society*, 20, 5–30.
- Yamagishi, T., & Mifune, N. (2009). Social exchange and solidarity: in-group love or out-group hate? *Evolution and Human Behavior*, 30, 229–237.
- 横田晋大・結城雅樹 (2009). 外集団脅威と集団内相互依存性——内集団協力の生起過程の多重性—— 心理学研究, 80, 246–251.
- Yoshida, M., Gordon, B., Heere, B., & James, J. D. (2015). Fan community identification: An empirical examination of its outcomes in Japanese professional sports. *Sports Marketing Quarterly*, 24, 105–119.

Summary

Examination of ingroup cooperation using the category that participants who like a Japanese baseball team

— A vignette experiment by scenarios where cost of helping was not emphasized —

Yumi Nakagawa

The purpose of this study was to examine psychological mechanisms of ingroup cooperation using a real group category. In the vignette experiment conducted by Nakagawa et al. (2015), ingroup cooperation was simultaneously triggered by psychological mechanisms on the basis of both Social Identity Theory (SIT) and Bounded Generalized Reciprocity hypothesis (BGR). When the replication of Nakagawa et al. (submitted) expressed cost of cooperation, the psychological mechanism of BGR was salient more than SIT. However, Nakagawa et al. (submitted) did not consider the situation when the cost of cooperation was not at all. Therefore, we aimed to test whether the psychological mechanisms of BGR was not salient in a vignette experiment when cost of cooperation was trivial. But, we analyzed with participants who like a Japanese baseball team because in this study could not gather enough baseball fans. The result that it was revealed that ingroup cooperation was triggered by BGR even if cost of cooperation was trivial. Future studies will be needed to confirm these results with target of Japanese baseball fans.

key words: ingroup cooperation, baseball fans, Social Identity Theory, Bounded Generalized Reciprocity hypothesis